



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	普通科高校のインターンシップにおける生徒の『学び』の意義について：高校生の感想文分析を通しての一考察
Author(s)	酒井, 貞彦
Citation	公教育システム研究, 3, 97-125
Issue Date	2003-12
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/22075">https://hdl.handle.net/2115/22075</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	3_P97-125.pdf



# 普通科高校のインターンシップにおける生徒の『学び』の意義について

## ——高校生の感想文分析を通しての一考察——

酒井 貞彦\*

### 目次

#### 序章 研究の動機

#### 第1章 視点と課題の設定

- 1 高校生に欠けているもの
- 2 生涯教育・生涯学習の概要と高校生が必要とする生涯学習能力
- 3 「学び」論の整理と高校教育における「学び」について
- 4 課題の設定

#### 第2章 『学び』論の検討とインターンシップの有効性をみる枠組みの規定

- 1 インターンシップの有効性を見るもの
- 2 高校生に必要な力とインターンシップの有効性について

#### 第3章 高校生の感想文分析

- 1 調査対象校(インターンシップ実践校)の概要
- 2 感想文(報告書)による分析のねらいとその方法
- 3 感想文(報告書)の分析
- 4 感想文分析のまとめ

#### 終章 まとめ(インターンシップの有効性)

資料 平成9年度栃木県立石橋高等学校「事業所体験」の生徒の報告書(感想文)

### 序章 研究の動機

日本においてインターンシップが政策上初めて登場して<sup>1</sup>から6年を経過し、高等教育から中等教育まで幅広く実施されてきている<sup>2</sup>。北海道の教育施策においても、高校生の「進路指導の充実」のために2002年度からインターンシップが一つの事業として明確に位置づけられてきている<sup>3</sup>。

また、日本の高等教育や北海道で展開されているインターンシップは「就職に繋げるため」や「学生・生徒と企業とのミスマッチを防ぐため」、「学生・生徒の早期離職を避けるため」に行われていたり、体験させること自体が目的となってしまう場合が多い。

そこで、筆者はインターンシップが単に学生・生徒の就職のために行われてよいのか、ただ体験させれば良いのかという点について疑問を感じ、調査・研究をしたいと考えようになった。仮説としてインターンシップは学生・生徒に対してキャリア探索を可能にし、自己を見つめ直す貴重な場となるだろうと考えたのである。したがって、高校教育において職業・就職と最も距離のある位置に存在する、普通科高校で実践されているインターンシップの事例に焦点をあてたのである。

しかし、インターンシップ(就業体験)について、佐々木亨が類型化について述べている<sup>4</sup>が、他

\* 北海道大学大学院教育学研究科修士課程修了(教育行政学)

キーワード：インターンシップ、普通科高校、学び、自己

はレポート・紹介的なものがほとんどで、研究論文として発表されているものは多くない。初等教育から高等教育まで、様々な年代や教育機関等でインターンシップという言葉が使われているが、定義・意義、類型化、課題などについて十分な検討が進んでおらず、今後インターンシップ論の概念整理が必要である。

しかし、ここでは筆者が考える「インターンシップ」を仮説的に提示するにとどめる。筆者は、2000年よりインターンシップの先行研究の検討と普通科高校のインターンシップの事例の調査<sup>5</sup>を行なってきた。詳細は割愛するが、その調査より、仕事の大変さを教えるためとか、社会に出るのに準備させる社会性の教育として、実際に普通科高校でインターンシップが行われている。また、弱者を助ける気持ちを重視し、奉仕の精神の育成をインターンシップに求めたり、さらには、体験させれば学校で授業を受けるよりはましであろうと、安易に実施されている高校もみられたのである。

これらから、普通科高校のインターンシップの実施条件は、「ただ体験させればよい」とか「心の教育」が行われることではなく、「進路・キャリア探索」あるいは「自己の将来や生き方を考えさせる」という目的で行われる必要があると考えるに至った<sup>6</sup>。

したがって、筆者のこの調査結果より、普通科高校におけるインターンシップの定義は、「①生徒の進路・キャリア探索、または自己の将来や生き方を考えさせる目的で、②学校は生徒の実情にあわせ、明確な理念・目的を持ち、教員は内発性および共通理解を持った上で、③生徒の希望する仕事・職種を職場にて体験実習(就業体験)させること」ものとして論を進める。

## 第1章 視点と課題の設定

### 1 高校生に欠けているもの

ここでは、筆者がインターンシップを高校教育において、どのような視点から捉えるかについて述べるとともに、本論文の課題を設定する。

高校におけるインターンシップを捉える視点を提示する前に、まず現在の高校生が欠けている「学び」は何かという視点の考察を行なう。高校生の現在置かれた状況は中学段階での進路選択・決定のメカニズム、高校在学中の進路変更、教師の教育内容や評価を改善しようとする意識の無自覚、社会の長引く不況などにより非常に不安定で、自分の将来に対して明確な考えや希望を持っていないと考えられる。つまり自己を見つめることに対しての「学び」が欠落していると考えられる。

したがって、高校生には自己を見つめ、自己の将来を探索する仕方・方法を学ばせる必要があり、それによって希望をもたせることが重要であると筆者は強く感じている。そこで、「自己を見つめ、自己の将来を探索する仕方・方法を学ばせる必要」という部分に関係する見方を2点提示したい。

第一は生涯にわたってアイデンティティ形成し、自己探索すること、いわゆる「生涯教育・生涯学習」という視点である。生涯にわたって自己を教育する能力、あるいは学習する能力がなければ「生涯教育・生涯学習」は成立しないと考える。高校はそれを成立させるための基礎的な能力を身につけさせる重要な時期であろうと捉えるのである。

第二は「学び」とはどのようなものを考察する視点である。従来の固定的なイメージのある「勉強や学習」ではなく、人間の「学び」とはそもそもどういうことをいうのか。「学び」にはどんなものがあるのかを問うことによって、高校に必要とされる「学び」を明確にしたい。以上2点について次に考察する。

## 2 生涯教育・生涯学習の概要と高校生が必要とする生涯学習能力

生涯教育・生涯学習の契機は1965年のユネスコ成人教育課長、ポール・ラングランの「education permanent(永久教育)」からと言われている。ラングランは成人教育は「第一に一つの欲求を感じ」なければならず、「第二には、その欲求満足のために学習する必要性を持たなければなら」なく、「また、同時に、自分のために、理論的、実地的学習の技術を、早くから実行に移す気にならなければならぬ」とし、「こうした様々な条件は、初期の学校教育が、学校生活のあとに引き続いて、生きていくかぎり発展していく生涯教育への欲求と能力を引き出すときはじめて、実現される」と指摘した。また、ラングランは学校を「学び方を学ぶ」場につくり変えるべきという立場であり、また、一般教育と職業教育の統合などにも言及している。

高校教育においても生涯教育・生涯学習という視点が必要であることはジェサップの「生涯学習が実現するためには、学校は自らを教育を行う連続体の一部を構成しているものと考え、児童・生徒に適切な態度を形成しなくてはならない」というと考えからも明かである。しかし、現実には、学校は生涯学習の理念を意図的に実現することをほとんどおこなっていない<sup>7</sup>状況であり、学校の機能転換が重視されている。

1976年、ユネスコ第19回総会での生涯教育の定義の中で「この体系において男性及び女性は、それぞれの思想と行動との間の不断の相互作用を通じて、自己の教育を推進する。教育及び学習は就学期間を限られるものではなく、生涯にわたり、あらゆる技能および知識を含みあらゆる可能な手段を活用し、かつ、すべての人に対し人格の十全な発達のための機会を与えるものであるべきである」としており、普通科の高校生にもあらゆる技能および知識の活用の機会が与えられるべきと考える。

また、同総会では新しい人生を切り開くための「人生探究の学習能力」が必要で、これを開花させるのに必要な生涯学習能力の基礎は「潜在能力の覚醒」、「洞察力(思考力)の開発」、「自己実現の達成」<sup>8</sup>であるとしている。しかし、この生涯学習能力の基礎とされているものは抽象的過ぎる。

そのため、ドローール報告書の中で、教育の原則とした「知ることを学ぶこと(learning to know)」、「為すことを学ぶこと(learning to do)」、「ともに生きることを学ぶこと(learning to live together)」、「人間として生きることを学ぶこと(learning to be)」の4つ<sup>9</sup>を参考にしたい。

同報告書によれば、「知ることを学ぶこと」は理解の手段を獲得することであり、「為すことを学ぶこと」は自らの置かれた環境の中で創造的に行動することを学ぶこと、「ともに生きることを学ぶこと」は社会のすべての営みに参画し協力することを学ぶこと、「人間として生きることを学ぶこと」は3つの原則から必然的に導かれるとしている。

また、このドローール報告書の概念をより具体的な解説として、高橋は生涯学習能力形成要素として文化探求性として「問題解決能力」、「情報運用能力」を自己成長性として「自己実現能力」、「社会共生能力」の4つの能力になると解説している<sup>10</sup>。

この4つの能力を本論でのインターンシップの有効性を見る軸としたい。高橋は上記4点の能力を次のように述べている。

まず、1点目の「問題解決能力」は問題の発見、状況分析、状況判断などをする力であり、2点目の「情報運用能力」は情報判断、情報活用、情報創造などの力である。次に、3点目の「自己実現能力」は自己設計、自己表現、自己発展などをするものであり、4点目の「社会共生能力」は社会適応、国際理解、人間関係等が出来る力<sup>11</sup>であるとしており、これを筆者は援用する。また、勉強する意欲が湧いたり、感動、活力などの情意面に関するものはまとめて「自己実現能力」へ含まれるものとする。

以上のより、「問題解決能力」、「情報運用能力」、「自己実現能力」、「社会共生能力」という4つの生涯学習能力形成要素を規定したが、高校教育は生涯教育・生涯学習の基礎作りの重要な一過程として位置づけなければならず、これらの要素を高校教育において、当然生徒に習得させる必要がある。そして、インターンシップは学び手(生徒)が主体となり、直接社会への「参加的学習」を可能にし、キャリア教育を含め、人間の生き方の問題にまで迫る効果を持つ可能性、および「生涯にわたる学び」を促進させる可能性があるという仮説を持つに至った。

### 3 「学び」論の整理と高校教育における「学び」について

従来の「固定的イメージの勉強や学習」および「学び」について佐伯胖、藤田英典、佐藤学らが考察しているが、ここでは特に佐藤の考えを整理し、そこから高校教育に必要な「学び」を明確にしていきたい。

佐藤は、まず「勉強」について次のように捉えている。日本において教師たちから子どもたち、親たちまでも「勉強」という言葉を使用しているが、これは日本的表現である。この「勉強」は、「学習」に置き換わって1980年代の急速な量的・制度的拡充を達成してきた<sup>12</sup>。このことにより、「勉強」という言葉は知識詰め込み主義や一元能力評価主義をイメージさせることになったのであり、学校における学び手(生徒)の主体性が重視されないものとしている。

次は「学習」と「学び」についての佐藤の考えを示す。佐藤は、「学び」は子ども一人ひとりが内側で構成する個性的で個別的な「意味の経験」に他ならない<sup>13</sup>とし、「学び」を触発し援助できても操作し統制することはできないと捉える。また、「学び=まねび」は「模倣」と「創造」、「共同性」も表現しており、文化的共同体への参加および、徒弟的学習としての「学び」へと拡大する契機を含んでいる言葉である<sup>14</sup>とし、学校教育における「学習」のイメージを受動的で静的な活動から、目的的で力動的な活動へと転換させることが可能と捉える。

また、佐藤はデューイとヴィゴツキーの再検討をしている。日本はデューイに関して誤った受容があり、デューイの「経験」は「体験」以上の意味を形成しておらず、「知識」は「探究」としての性格を獲得してはいなかった。わが国の新教育において、デューイの拡大再生産とその後の急速な衰退が見られたのは、広く知られていることであるが、それはキルパトリックにより「反省的思考」は「反射的活動」へとすり替えられたためであったとしている。

さらに、デューイとヴィゴツキーの理論の共通点を『「問題解決的思考」』という学びの活動的性格や「知識は学びの活動とコミュニケーションの過程において連続的に構成され、変容し発展し続けるもの」、「学びを社会的に構成された対話的、歴史的な過程」、「学びを「まねび=模倣」などとして再定義する視野を提供し、社会的過程として展開されて意味を持つ」と捉えている。

「学び」の活動を意味と人の関係の編み直しとして再認識するとすれば、「学び」の実践は学習者と対象との関係、学習者と彼/彼女自身(自己)との関係、学習者と他者との関係という3つの関係を編み直す実践として再定義することができる<sup>15</sup>としている。つまり、学ぶ活動とは対象世界の意味を構成する活動であり、自己の輪郭を探索し、かたちづくる活動であり、他者との関係を紡ぎあげる活動であるとしているのである。

以上の佐藤の援用より、高校における「学び」とは、従来の「固定的イメージの勉強や学習」ではなく、文化的実践への参加や「自分探し」としての探求を通して、自己・他者・対象という3つの関係を編み直すことであると定義する。

また、この「学び」の定義によると、「生涯教育・生涯学習」の4つの能力は、「学び」の自己・他者・対象に対しての能力と考えられる。つまり、「自己実現能力」は「自己」へ、「問題解決能力」、「情報運用能力」の2つは「対象(物)」へ、「社会共生能力」は「他者」へ働きかける能力で

あり、読み替えることが可能であろう。

したがって、「生涯教育・生涯学習」の4能力は、佐藤の「学び」の中に含めるものとし、この「学び」を高校教育に必要な「学び」として、今後考察を進めていくことにする。

筆者は高校教育において、上記の「学び」を実現することだけを目的とするのではなく、現在の学校において「学び」を可能にする場面を取り入れていくことができないかという立場である。すべてを具体的、特殊的な内容で学校教育を構成することには反対であり、抽象的な学問も当然重要と考える。ここで、特に主張したいことは生徒が抽象的学問と具体的・実的事象との関係のつながりを明確かつ理解していく必要があるということであり、そのためには現在のアカデミック科目中心の教育では不十分で、体験や実感を伴う「学び」の導入が必要なのである。

ただ、体験や経験について早川が、デューイの考察で触れており、ただ経験させればよいというものではなく、経験の「意味」を豊かにし、将来の経験を「方向づける」ことが必要である<sup>16</sup>としていることには注意しなければいけないであろう。

#### 4 課題の設定

現在の高校生が欠けている「学び」は何かという問いから出発し、上記で検討してきたことより、高校における「学び」を規定した。

この「学び」は高校教育において筆者も必要と感じるが、実際にはほとんどの高校で生徒に「学び」を提供していないといっているであろう。これらの「学び」を実現するには、今までの学校内だけでの教育実践では無理があると思われる。ではどうすればよいか。それは本物の経験的場面から、社会の中での自分を見つめることが可能となるインターンシップの取り組みが有効であり、それが「学び」を実現する一つの手段になるのではないかと考えるのである。

したがって、本論文の課題は、インターンシップが、高校生に対して「学び」を提供するものであるかを明らかにすることである。

つまり、本論は普通科高校のインターンシップにおける生徒の「学び」の意義について検証するものである。

次章では、「学び」についての検討をさらに進めるとともに、その分析方法を提示する。

## 第2章 『学び』論の検討とインターンシップの有効性をみる枠組みの規定

### 1 インターンシップの有効性を見るもの

インターンシップの効果や意義については今までに、様々な場面で述べられている。例えば、理産審答申の「今後の専門高校における教育の在り方等について」ではインターンシップの教育効果を第一に「学校における学習と職業との関係についての生徒の理解を促進し、学習意欲を喚起するなど、専門高校における教育内容・方法の改善・充実に資することができる」とし、第二に「生徒が自己の職業適性や将来設計について考える機会となり、主体的な職業選択の能力や高い職業意識の育成が促進される」としている。

また、文部科学省は「高等学校インターンシップ事例集」の中で、インターンシップの意義を次の5点としている。1点目は「勤労の尊さや創造することの喜びの体得」、2点目は「望ましい勤労観・職業観の育成」、3点目は「職業生活、社会生活に必要な知識・技術の習得及び創造的な能力や態度の育成」、4点目は「啓発的経験と進路意識の伸長」、5点目は「社会の構成員として共に生きる心を養い、社会奉仕の精神の涵養などに資する」である。

しかし、上記の理産振答申、文部科学省のインターンシップの教育効果や意義は、生徒の立場からではなく生徒に実施させる側(学校、文部科学省)の希望や理想を込めてのものである。実際に、インターンシップを実施した学校側や生徒を受け入れた企業等から見た、生徒の言葉遣いや態度などの変化に関する報告書、レポートは数多く見られる。だが、生徒の内側、内面に迫りインターンシップがどんな点で有効かについて明確に示された論文やレポートなどは皆無である。

そこでインターンシップが生徒にとって実際にどんな効果があるのか。それは、生徒がインターンシップを通して何を見て、何を学んでいるのかという、内面の部分を見ることなしにインターンシップの有効性を見ることにならないのではないかと感じたのである。そして、生徒の内面を見る最適なものとして、インターンシップを終えての率直な思いが、言葉や文章に現れる感想文を分析しようとするに至ったのである。

## 2 高校生に必要な力とインターンシップの有効性について

分類枠組みを考える前に、まず現在の高校生にもっとも必要とされる力、欠けている力の考察を行う。その上でインターンシップの有効性を見る分類枠組みを明示したい。序章において現在の高校生にもっとも必要とされる力、欠けている力については述べた。それを確認すると高校生は「自分が何をしていけばよいのか」や「目標が明確にならないまま」次の段階の進路のみを決定している現状があるため、結果的に職業選択意識が低く自己の将来を積極的に意識することがない生活や生き方をしていることが問題であると述べた。高校生は現実世界についてあまり知らず、それ以上に自己に対する職業適性の理解・認識不足、進路を探索していく力の欠如が問題であると考えた。したがって現在の高校においては自己の将来がイメージできず、狭い自己の世界だけで生きている生徒が多く存在すると考えるのである。

このことから、筆者は高校生に必要な能力を自己について客観的かつ明確な判断ができ、情報などを積極的に収集し、行動することによって自己の可能性を伸ばしていくものであると考える。その能力の前半部分を「自己をより深く知る力」、後半部分を「自己の可能性を広げる力」とここでは呼ぶことにする。ではこの2つの力とはどのようなものであろうか。

1点目の「自己をより深く知る力」とは自己の内側に向いているものであり、「自分とは何か」という問いに対する答えの一部を発見したり、「自分の知らない自分」を探していくこと。つまり自分づくり<sup>17)</sup>に他ならない。したがって、自分の適性や興味・関心、価値基準などを客観的かつ明確にすることなどができる力であり、具体的には自分があることに対して適性があるとか興味・関心があると判断する力、価値基準を明確にしていく力などであると捉える。

2点目の「自己の可能性を広げる力」とは自己と区別された外側に向いているもので、自己にはない情報・視点を自己の中に取り込む力、あるいは自己の世界をそれらが含まれる世界まで押し広げる力と捉える。したがって、様々な情報や新しい世界を常に見ようと知ろうとする積極的な姿勢が大切であり、その体験したものから外にあるものと自己とを対比させ、その後自己の外側にあったものを自己の中においての位置づけを可能にするのがこの力であると捉える。具体的には人の考えに触れ新たな視点が生まれたり、芸術や文化を体験し憧れや素晴らしさを感じるなどであると考えるのである。

また、この2つの力は排他ではなく一方の力が身につけば他方も影響を受け向上するというような相互に補完する関係であると考えられる。自己の内側への力の「自己をより深く知る力」が身につくようになれば、より自己を外側にも広げようとする「自己の可能性を広げる力」を助長することになり、その逆に「自己の可能性を広げる力」が身につくようになれば「自己をより深く知る力」がより強くなるというように相乗効果があると予想される。

以上より、高校生に欠けており、最も必要とされる力を「自己をより深く知る力」および「自己の可能性を広げる力」の2つとして、今後捉えていく。

次に、「学び」論の視点から「自己をより深く知る力」および「自己の可能性を広げる力」を捉えてみる。佐藤は、「学び」とは子ども一人ひとりが内側で構成する個性的で個別的な「意味の経験」に他ならなく<sup>18</sup>、学ぶ活動とは対象世界の意味を構成する活動であり、自己の輪郭を探索しかたちづくる活動であり、他者との関係を紡ぎあげる活動<sup>19</sup>であるとして、「学習者と対象、学習者と学習者自身(自己)、学習者と他者のそれぞれの関係の編み直し」の重要性を述べている。この立場からすれば、インターンシップは働く「他者」を見せ、仕事や職場・組織などの物や文化の「対象」に触れさせ、そして「学習者自身(自己)」を確認、再確認させる働きを持ち、そのことで生徒は「物・人・自己」の3つの関係の編み直しが行われていると考えられる。この関係の編み直しでは、体験による自己内対話から自分自身の輪郭を自己の内側から探索し、かたちづくる活動が行われるが、これが上記で述べた「自己をより深く知る力」となるであろう。

さらに、人、物、空間など他者文化に触れることは、新たな情報や新たな世界の理解、および獲得につながる。その理解・獲得のための活動は自己と自己の外側の世界の接する部分を明らかにする作業であり、自己から離れているものと関係を紡ぎあげることで、自己の輪郭を探索しかたちづくる活動に他ならない。したがって自己の外側とは区別されるものに対して関係を持つ「学び」の活動は、上記の「自己の可能性を広げる力」にもなるのである。この点から考えれば「自己をより深く知る力」および「自己の可能性を広げる力」を持つということはまさしく佐藤の「学び」になっており、高校教育に必要な「学び」になっているといえることができる。

したがって、第1章の終わりに設定した本論の課題は、次のように換言できる。インターンシップには、高校生に対して「自己をより深く知る力」および「自己の可能性を広げる力」を獲得させることができるかを検証することである。

もし、この2つの力を獲得させることが認められれば、インターンシップは高校生に「学び」を提供するといえるのである。

以上、インターンシップの有効性を見る枠組みとして、高校生に必要とされている力と「学び」論の考察から、「自己をより深く知る力」と「自己の可能性を広げる力」を提起した。

### 第3章 高校生の感想文分析

ここでは、本論の課題、つまりインターンシップが、「自己をより深く知る力」と「自己の可能性を広げる力」を生徒に獲得させることができるのかを検証する。そのため、筆者が調査した普通科高校で、最もインターンシップが効果的に運営されていると評価する、栃木県立石橋高等学校を取り上げる。そして、生徒が実際に体験してきた後の感想文を詳しく見ることから、インターンシップの「学び」を検討する。

#### 1 調査対象校(インターンシップ実践校)の概要

##### (1) 栃木県立石橋高等学校と同校のインターンシップの概要

栃木県立石橋高等学校は1学年6クラス、全校18クラスで生徒数740人<sup>20</sup>の中規模の高校である。同校は例年90%の生徒が4年制大学に進学し、そのうち約33%が国公立大学へ進学する<sup>21</sup>という県内有数の進学校である。

同校のインターンシップ(就業体験)については、1997年に進路指導の一環として始まった。同年の2学年担任団(6名)と進路指導部が中心となり実施し、「事業所体験学習」という学校行事で

現在まで行われている。

現在は1年生で実施しており、日数は2年生の見学旅行中に1日から3日の間で各自が希望する事業所で体験できる形態である。また、体験前には「体験学習事前研究・質問票」を提出し、終了後には「体験学習報告」を書くことが義務づけられている。

同校のインターンシップ(就業体験)の特徴としては3点ある。第一は中規模校の進学校で、「大学進学への出口指導だけでなくもっと将来を見据えた指導を必要と感じ、そのために社会を体験させたいだろうという考え」、進学指導・出口指導から一歩踏み込んだ進路探索・人生設計という大きな進路指導の枠組みの一環として明確な理念のもとインターンシップが実施された点である。

第二は学校現場、特に教員の発意で実施された点であり、全国施策に組み込まれたものではなかった点である。

第三はインターンシップ場所の業種の多さである。同校の平成9年度のインターンシップ場所(体験事業所)は宇都宮市の県立施設や百貨店、新聞支局、ホームステイ宅など合計26、同市以外の県内の事業所は石橋町役場や小山市役所、警察犬訓練所など13、また、県外は文部省、国立博物館、東京電力、大学(武蔵工大、獨協大、明治大)など16で、合計55の事業所<sup>22</sup>で実施され、次年度以降年々増加している傾向にある。

## (2)インターンシップにおける生徒の報告書について

同校は1997年度、インターンシップの終了した2学年の生徒248名一人ひとりに次の8点にわたって「体験報告書」をフリーに書かせている。

1. あなたはどんな事をしてきましたか。具体的に書きなさい。
2. 職場の人達の働きぶりはどうでしたか。
3. 職場の雰囲気はあなたはどう感じましたか。
4. 今回の体験学習で、いままで知らなかった事に様々気づいたことと思います。具体的に書いてください。
5. 今回の体験を通して、学び得た事などを書いてください。
6. 『働く』ということはどういう事だと、今考えていますか。書いてください。
7. 今、あなたは自分の将来をどう心の中で描いていますか。書いてください。
8. あと、一年で卒業です。今後の決意を述べなさい。

この中で、1の「あなたはどんな事をしてきましたか。具体的に書きなさい。」は生徒の感想ではなく分析する対象外なので除く。また、その他の7点で2と3、4と5、7と8において生徒の感想に大きな差が見られなかったため、それぞれをまとめ、6の「働く」ということについては単独で見ることにして次の4つに分けた。

- (1) 「職場の人達の働きぶり」、「職場の雰囲気」(32名分、通し番号1~32)
- (2) 「気づいたこと」、「学び得たこと」(32名分、通し番号33~64)
- (3) 『働く』ということ(15名分、通し番号65~79)
- (4) 「自分の将来」、「卒業を一年後に控え、今後の決意」(22名分、通し番号80~101)

また、分類対象は生徒全員分ではなく(1)、(2)は各32名分、(3)は15名分、(4)は22名分を筆者が抽出した計101名分である(資料参照)。抽出した理由は同様の感想を省いたためである。

## 2 感想文(報告書)による分析のねらいとその方法

ここでは筆者が調査した高校の中で、インターンシップが効果的に実践されていると考える栃木県立石橋高等学校の生徒一人一人の体験学習後の感想文(報告書)による分析のねらいとその方法について述べる。

筆者の調査した栃木県立石橋高等学校はインターンシップ後、生徒に対して「体験学習はあなたが進路を考えていく上で、参考になりましたか」や「今度の体験学習で学んだことは何ですか(複数回答可)」について選択肢を用意したアンケート<sup>23</sup>を実施している。例えば、1点目の「参考になりましたか」という問には「大変参考になった」「ある程度参考になった」「参考にならなかった」の3つであり、1997度の結果はそれぞれ、「36%」、「57%」、「6%」であった<sup>24</sup>。また、2点目の問については11の選択肢が用意され、生徒全員(248名)に対する割合は、仕事に関する勉強の必要性44%、働くことの厳しさ41%、人間関係の重要性39%、働くことの楽しさ28%、学校と社会の違い28%、社会の中の企業の役割25%、体力の必要性19%などとなっていた<sup>25</sup>。

しかし、これらの結果から、インターンシップが単純に「生徒に参考になるものであり、上記の項目・内容を学ぶことが可能」である、したがって、インターンシップの有効性は「上記の様々なものを学ばせることにある」と結論を出すことに対しては疑問を感じる。石橋高校のような選択肢のあるアンケートの実施では教師が用意する選択肢によって内容が大きく左右される。また、選択肢以外に学んだことがあった場合、それが明確にならないということも危惧される。

したがって、インターンシップの有効性を見る軸を考察し、それを明らかにすることで選択肢のあるアンケート等ではなく生徒の率直な感想が書かれている文章を分析することから、生徒はインターンシップで何を見、何を学んでいるのかという生徒の視点によるインターンシップの有効性を明確にしたいと考えたのである。

次にその方法であるが、同校は生徒に感想文(報告書)で上記の内容の通り、ある程度限定してはいるが生徒に自由に記入させている。これらの生徒の言葉を分類する方法により検証したいと考えた。しかし、同校生徒101人分の感想文(報告書)は自由な形式のため生徒の言葉や表現は多岐に渡っており、多面的な意味も含んでいるので単純に分類するのは困難である。そのため、具体的には筆者が一度分節化し、帰納法的に分類するという方法によって、本論の課題を明らかにしたい。

### 3 感想文(報告書)の分析

上記2の分類した結果、生徒の感想の内容は12の項目に分かれた。そして、この12項目を大別すると次の5つに分けることができた。

1点目は「仕事をする人」を対象にした生徒の感想であり、大別の2点目は「仕事」を対象にしたもの、3点目は「職場・組織等の空間」を、4点目は職場や学校を含んだより広い「社会」について、そして5点目は「自己」をそれぞれ対象にしている感想である。次にこの大別された5点について、それぞれ生徒の具体的な言葉を交えながら内容・項目を見ていく。カッコ内の番号は資料の生徒の通し番号である。

#### ①「仕事をする人」

1点目の「仕事をする人」を対象にした感想は2つの項目が含まれているが、それらを具体的に見ていく。1つ目は働き方や働く姿勢を観察した内容あるいはその姿勢を評価した内容である。「見えない所では大変だと思った。1日中立ったままなのに元気だった。(百貨店販売体験の男子生徒2)」や「とても手際が良く、素早くしかも正確に仕事が行われていて、接客の面でもお客さ

んの立場に立ってお客さんが最も良い買い物ができるように適切なアドバイスをしていた(百貨店販売体験の男子生徒 3)、「すごく素早く、能率良く働いていた(個人病院体験の女子生徒 4)、「子供たちに自分も全力でぶつかっていくのではなく力の抜き方を知っていて緩急をつけて上手に対応している(幼稚園体験の女子生徒 7)」などである。また、「何よりもまず自分の心構えが大切だと思いました。なぜこの職業を選んだのかと聞いたら、自分が一番苦手なものだったから、とおっしゃっていた人がいたのですが、そうやって苦手なものをあえてやってみるということもあるのだなと思いました(環境保全研究所体験の女子生徒 48)」など働く動機や心構えなどの内容も含めておく。

2つ目は「一人一人が社会人として大きく見えた(新聞社体験の男子生徒 13)」、や「手際の良さはさすがプロだと思った(航空機の機体・部品製造業体験の男子生徒 15)」、「患者さんがたくさん入院しても、看護婦さんは患者さん一人一人の病状を把握していて、すごいと思った(個人病院体験の女子生徒 19)」、「先生方は、踊りの時も子供達と一緒に楽しそうに踊っていた。私たちは恥ずかしがってしまって、堂々と踊れなかった。やはり、先生はすごいと思った(幼稚園体験の女子生徒 23)」の特に「すごいと思った」という部分など、働く人に対して抱く憧れや感動などの思いが表れている内容である。

以上のように「仕事をする人」を対象にした感想文の内容は「①働き方や働く姿勢の観察や評価」と「②働く人に対する思い」の2つに分かれたが、あらためてこれらの内容を見ると、「仕事をする人(個人)に対する姿勢や生き方への評価」という分類名にすることが可能である。

この「仕事をする人」を対象として見ている生徒の感想についてまとめる。上記2点のうち、1つ目の「働き方や働く姿勢の観察や評価」と2つ目の「働く人に対する思い」はほぼ同様の内容と捉えることもできるが、ここではあえて分けてみた。それは他人を見るということ、特に初めての人を見るという行為は客観的に人を評価することから始まって、自己と他との接近が見られることが表れていることを示したかったからである。仕事をする人を見るという行為は客観的に人の動作や人間性の評価をしているが、そこには自分の外の情報としてだけでなく、同時に憧れや感動、感心するといった感情を抱いていることがわかるのである。そこでは生徒は、自己を他者と対比させ、あるいは置き換えるなどの活動が行われており、他者を見ることで、自分の新たな情報として理解・獲得し、自己の世界を広げていると考えられるのである。

## ②「仕事」

次に大別の2点目の「仕事」を対象にしたものについて見る。ここには2つの内容が含まれる。1つ目は一つの仕事・職業について深く、詳しく知る内容で「他社の車の作りなども勉強して知っておく必要があるという大変さを感じた(自動車販売店体験の女子生徒 36)」や「最先端技術を使う航空機の製造を、ほとんど人の手によって行われているということ。また、人の命を預かることになる航空機の製造では、作る人、一人一人の責任がすごく重いということ(航空機の機体・部品製造業体験の男子生徒 38)」や「市役所の仕事をしていて一番辛いことは、住民の苦情を聞くことだそうです(市役所体験の男子生徒 56)」、「大学の先生の仕事を拝見して、同じ法学部でも細分化された専門分野に基づいて、研究や講義をしていることを知り、驚いた(大学法学部体験の男子生徒 60)」など専門的な仕事内容や仕事・職業の持つ意味を理解したり、仕事に対する心構えの必要性を認識した内容である。

2つ目は「栄養士という仕事は入院患者の食事を作っているだけかと思っていたら、患者とのコミュニケーションをすごく大切に、患者との様々な面でふれあっていることを知りました。看護婦さんの仕事は、体力を必要とする職業であることが、1日の体験実習を通して実感した。そして看護婦さんは患者さんの病気を治す手助けをするだけでなく、患者さんの相談相手やお

しゃべり相手になるなどの精神面のケアも大切な仕事だとわかった(個人病院体験の女子生徒 41)、「はじめから自分が思っているような仕事はできなくて、最初は裏方のような仕事から始めることが分かった。だから我慢が必要だと思う(県国際交流協会体験の男子生徒 49)」、「僕も最初はあまりいいイメージを持っていなかったのですが、実際に見学してみると、住民の人が納得いかないようなところは条例の制約があったり、それ相当の理由があり僕たちはあまりにもこの仕事に対しての理解が浅かったと思いました。人間関係を維持していくにはお互いの理解が必要だと思いました(市役所体験の男子生徒 56)」など仕事にはいろいろな段階や順序性があることやいくつかの側面があることを理解している。生徒は仕事に対してイメージを持っているがそのイメージと実際との差異が認識されていると考えられる。

これらを整理すると「①仕事の概要、プロの技術、専門性の理解」と「②仕事にはいくつかの段階・側面があることへの理解およびイメージとの差異」であり、分類名は「仕事・職業についての理解・発見・確認」とすることが可能である。

ここでの「仕事の概要」や「仕事の大変さ」、「仕事に必要とされる適性」、「専門的技術」など、仕事を純粋に見ている部分についてまとめる。生徒は仕事を見ることで、今まで知らなかった内容や発見等を自分の中に取り入れようとしていると考えられる。また、多くの生徒は自分が何らかの興味・関心を持っている職種を希望し実習していると考えられる。なつてみたい職種をより深く知りたい、興味ある職種はどんな仕事をしているのか確認したいと生徒は考えており、ある程度の仕事に対する知識やイメージがあると考えられる。そこで実際に実習を通して「仕事にはいろいろな段階や側面」があることを知り、生徒は自己の中に持っていた「仕事」と実際の対比が行われるのである。したがって、ここでは仕事に対するより深い理解と、広い視野を持つことができたと思えることができる。

### ③「職場・組織等の空間」

次は大別の3点目である。ここは「職場・組織等の空間」を対象とした内容の分類で次の3つの項目に分かれる。1つ目は、職場・組織が複数の人間がいて成り立っていることの認識である。具体的には「職場内では人と人との間に隔たりのようなものが全然存在せず、いつも和やかな環境の中で仕事を行っているという印象を受けました(農業試験場体験の男子生徒 1)」や「管理栄養士と栄養士、調理師、調理員がお互いに協力して仕事をしていた。(個人病院体験の女子生徒 4)」、「とても緊迫していた。学校も一つの社会というが、まったく違う世界だと思った(新聞支局体験の男子生徒 9)」など、協業と人間関係の重要性を理解している例や職場が複数の人間で構成され、それによる雰囲気を感じている例などである。

2つ目は仕事が複数の部門や組織で行われていることの認識である。具体的には「材料を選ぶのに自動のロボット車を使っていたりして、工場そのものがハイテクで機械的な感じがしたが、一方では手作業のところもあって、人間味があるというか、不思議な気もした(航空機の機体・部品製造業体験の男子生徒 15)」や「会社にはいくつかの部門(機関)があって、それらはそれぞれの働きとつながりを持っている。従ってその中の一つでも欠けてしまうと他にも影響を及ぼし、会社は成り立たない(自動車販売店体験の女子生徒 36)」などである。

3つ目は職場・組織の特性を見ている内容である。例えば「職場というのは、学校の延長ではなく、自分の責任が多くなるが、自分の能力を発揮できる場所で誇りを持って働ける所だと分かりました(精密機械製造会社体験の男子生徒 6)」や「職場にはとても大切なルールがあって、それは絶対に守らなければいけないものだと思った(食品製造業体験の男子生徒 52)」などである。

以上を整理すると「①職場・組織が複数の人間の存在により成立していることの認識」、「②仕事が複数の部門や組織で行われていることの認識」、「③職場・組織の特性の認識・評価」という「職

場・組織等の空間」を対象とした分類名は「職場・組織に対する認識・評価」とすることが可能である。

上記の3つ目についてまとめる。生徒は日常において学校や家庭以外の空間を感じたり、意識することは少ないと考えられる。特に高校においては同世代の一部の友人らとの狭い世界で生活しており、そういう友人との人間関係の方が家族より強くなる場合も多い。そういう意味ではある目的を持った会社等の職場・組織がいろいろな人間や役職で構成されていることを知り、人間関係の難しさ、重要さをはじめと感じた生徒が多かったのではないか。学校では人間関係をうまく築けなければ、無理して合わせる必要はない。しかし、職場ではそういうことは通用せず、いろいろな人の存在を意識し、受け入れ、その上で自分の世界を構築していかなければならないことを感じ取っていると考えられる。したがって、「友達同士でも会社の同僚でも良い人間関係を作ることが仕事を楽しくも辛くもするものだ」と学んだ(個人病院体験の女子生徒42)」や「自分たちが普段生活している場所と違って、裁判所などは、一歩足を踏み入れると、全く空気が違うと感じた。一人の人間が、人や企業の罪を決め、その判決により、人生が変わってしまった。企業が何億円という賠償金を支払わなければならなかったりするだけに、裁判官も、弁護士も、検察官も、皆真剣に働いていた(法律事務所体験の男子生徒29)」など、人間関係を良くしていく必要性の理解や職場・組織の雰囲気やイメージを学校とは異質なものであると認識し、評価している様子が見られる。このような考えは実際の職場を体験してはじめて得られるものであり、インターンシップの特に重要な視点であると考えられる。

#### ④「社会」

大別の4点目は職場・組織を越え、その先にある「社会」を見ている感想であり、視点が広くなっているものである。ここでは2つの内容に分類されるが、1つ目は「社会で生きていくには、人間と人間のつながりがとても大切だということも分かった(食品製造業体験の男子生徒52)」や「僕たちはあまりにもこの仕事に対する理解が浅かったと思いました。人間関係を維持していくにはお互いの理解が必要だと思いました(市役所体験の男子生徒56)」、「障害者の人達は、成人したらどのような生活を送っているのか、私は今までよく理解していなかった。今回の体験学習で「こころみ学園」に行き、そこで生活している人達の働きぶりなどを見て、健常者も障害者もそんなに変わらないと思った。確かに作業効率は悪かったりするかもしれないが、働くことに精一杯取り組んでいた(精神薄弱者訓練施設体験の女子生徒50)」など、様々な人の存在の理解や社会での人間関係、共生することの大切さを理解しているものや、「現在では一人一人の生活環境による汚染が進行していることから、私も生活を見直す必要があると思った(環境保全研究所体験の女子生徒47)」「今私たちがすべきことは木を植え作物を育て緑を増やすことだと思った(精神薄弱者訓練施設体験の女子生徒51)」など社会の問題に対する視点をもつなどである。

2つ目は学校や家庭と違う世界として社会を認識、意識化しているものであり、「社会の厳しさのようなものがわかったような気がします。1つの仕事を任されるにしても、学校などでは親切丁寧に1から10までその仕事の説明をしてもらえて、指示に従っていればそれで良いという感じがあるような気がします。これは、ある意味でとても楽であると思います。しかし、社会では説明してもらえても、指示されたことだけやっただけではいけないような気がしました(スーパーマーケット体験の男子生徒55)」、「仕事の大切さ、手抜きをすることはいけないということを知った。大人になったらこういう社会の中でやっていくのだなあと思いました(航空機の機体・部品製造業体験の男子生徒14)」や「和気あいあいの中にも社会の厳しさというものがあった。まだまだ理解しがたいものが多いと思った(家電販売店体験の男子生徒40)」など社会は学校とは違う世界であること、また厳しい空間であることを理解した感想である。

以上、「①社会の中のさまざまな人間の存在および社会の問題の認識」、「②学校や家庭と違う世界の認識、意識化」という「社会」についての分類名は「社会に対する認識・再認識・評価」とすることができる。

4点目の「社会に対する認識・再認識・評価」についてまとめる。高校生にとって社会を見ることはなかなか難しいことである。学校では教師の言葉、家庭では親や親戚、兄弟姉妹を通して社会についてのある一部を見たり、聞いたりする程度である。また、新聞やテレビ、インターネット等を利用し社会を見ることも可能であろうが、現実社会の一部を構成している職場・組織から直接社会を見ることに大きな意味がある。そのことで、生徒は学校や家庭以外からの視点をもつことができると考えられる。現在のありのままの社会を何のフィルターをも通さず、自分の目で見て判断すること、そしてその社会に対する自己の存在の意味を考えたり、生き方を見つけることができると考える。そして、当然のごとく学校や家庭についてどうあるべきかなどを考える機会も提供することがここでは言えた。

#### ⑤「自己」

大別の後、5点目の「自己」についての感想については3つの項目に分類される。まず1つ目は、進路・キャリアに関する方向性の明確化でここには「学習意欲や努力する意欲の発生」、「進路の方向性の明確化や可能性の拡大」、「進路について考える姿勢の発生」、「働くことについて」という4点に細分化される。具体的には「日本のあちこちの美術館や博物館にできるだけ勤めたい。日本だけでなく、海外の美術館・博物館で勉強してみたい(国立博物館体験の男子生徒)」や「がんセンターに行くまでは、薬剤師か臨床検査技師かで悩んでいたが、今回の3時間位の見学をして薬剤師になってみようかと夢を見るようになった(県立がんセンター体験の女子生徒80)」、「はっきり言って、就きたい職業や大学のことで悩んでいます。しかし、今回の体験学習は無駄ではありませんでした。このことを機にして将来のことを慎重に考えたいです(スーパーマーケット体験の女子生徒87)」、「どんな仕事に就くにしろ社会は厳しいし、今まで働くということは生活のためだと思っていたが、見学をして、自分の人生の生きがいとなるような仕事に就きたいと思うようになった(建設会社体験の男子生徒88)」、「行政などの点から福祉の仕事がしたい。しかし、働くことの大切さを知った今、ホームヘルパー等の仕事もしたいと思うようになった(精神薄弱者訓練施設体験の女子生徒92)」などである。

2つ目は、自己の行動や意識の評価に関する内容である。今までの自分の行動や意識についての反省や評価、またそれらを踏まえて意識が変化したことの自覚などがわかる内容である。具体的には「とてもやさしくゆったりした人が多く、和やかな雰囲気では自分は他の人に優しいだろうか?と考えさせられた(精神薄弱者訓練施設体験の女子生徒10)」や、「(障害者の人達の働きぶりを見て健常者と変わらないと思った自分について)私がそう思ったのは、心のどこかで、障害者の人達に対して偏見を持っていたのだと思う。この間違いに気付いてよかった(精神薄弱者訓練施設体験の女子生徒50)」、「この経験を生かし、自分を見つめ直し、社会から必要とされる人間になりたい(市役所体験の男子生徒97)」などである。

3つ目は、生き方に関する方向性の明確化であり、前向きな姿勢・意欲の発生や生きていく上での人間関係および相互理解の重要性の理解が見られる内容である。具体的には「いろいろな外国人と接し、他国の文化や生活を知ると共に、日本をもっと知ってもらいたい。自分の仕事に誇りを持って生きられるようにしたい(ホームステイ受入家族を見た女子生徒83)」や「悩んでいる人がいたら、同じ立場に立って一緒に相談し合えるような人になりたい。そうなれるように心がけていきたい(大学カウンセリング研究所体験の女子生徒101)」などである。

以上の「自己」を対象とした内容を整理すると、「①進路・キャリアに関する方向性の明確化」、

「②自己の行動、意識の評価・反省」、「③生き方に関する方向性の明確化」であり、この3つの項目をまとめた分類名は、「自己に対する評価・発見・理解」とすることが可能である。

大別5点目の「自己に対する評価・発見・理解」について、簡単に考察を加える。①の「進路・キャリアに関する方向性の明確化」は③の「生き方に関する方向性の明確化」に含まれるがここではあえて分けた。それは③は進路や仕事を越えて広くどういう生き方をしたいかが現れている内容があり、それらを明らかにするためこのように分類した。②に関しては、実際の仕事を見る、あるいは行うことで、自己の行動や意識に初めて気づいた生徒もいたようであり、行動や意識の評価・反省から意識の変化の自覚、自己についての視点の広がりまでが見られた。ここでは自己内対話が行われ、自己についての深い理解が進んでいると考えられる。

以上、石橋高校の生徒の一人一人の感想を、彼らがインターンシップにおいて何を見ているかという観点から分類した結果、12の内容に分けることが可能になった。さらにその12の内容を大きく括った場合、「仕事をする人」、「仕事」、「職場・組織」、「社会」、「自己」の5点に大別できる。

また、この5点目に関しては他の4点すべてに関係しているもので、「仕事をする人」の働く姿を見ることで、生徒が自己と対話する機会を得て、上記の感想、考えを持つことにつながると考えられる。他の「仕事」、「職場・組織」、「社会」も同様に、自己の外部、内部にかかわらず生徒のしている視点から最後は自分自身の中に取り込むことになり、4つの対象と自己との関係が出来上がる構図が浮かび上がる。したがって、5点目の「自己に対する評価・発見・理解」については他の4点とは質的に違うと考えるが、このことについては次で明らかにする。

#### 4 感想文分析のまとめ

栃木県立石橋高校の生徒の感想文分類により、インターンシップによる生徒の視点は「仕事をする人」、「仕事」、「職場・組織」、「社会」、「自己」の5点になっていることを明らかにした。

ここでは、分析のまとめを行い、生徒の5つの視点の間における関係、構図を考察する。そのことで、本論の課題として提示した、高校生にとって必要な2つの力が、インターンシップによって有効であることを明らかにしたい。

本章の3の最後で、5つの分類のうち、「自己」については他の4点と相関があることについて触れたが、はじめに相関を示す方法を述べる。筆者が今まで行った同校の感想文分類は、できるだけ短く文を区切り同様の内容についてまとめるという作業を行った。例えば、「この部分では働く人の姿勢を見ていて、次の部分では仕事の大変さを見ています」というような分類の仕方である。しかし、生徒の感想文全体を見たとき、生徒の視点が自己以外の人、物、空間、文化などさまざまなものへと変化しており、そしてその生徒の視点の先には「自己」があると考えた。実際に「仕事をする人」から「自己」へ、「仕事・職業」から「自己」へ、「職場・組織」から「自己」へ、「社会」から「自己」へという表現が見られた。また、複数の視点から「自己」へと向かうのも当然含まれていた。次は筆者が行った5つの分類とそれに含まれた生徒の感想文の番号を並べたものである。1点目から4点目までと5点目の「自己」とで重複している感想文の番号には罫線をつけてある。

##### A. 「仕事をする人(個人)に対する姿勢や生き方への評価」

###### ①働き方や働く姿勢の観察や評価

2, 3, 4, 5, 7, 11, 12, 13, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 23, 24, 27, 28, 29, 30, 32, 33, 43, 48, 50, 58, 61, 69

###### ②働く人に対する思い

11, 13, 15, 19, 23, 28, 32, 51, 64

B. 「仕事・職業についての理解・発見・確認」

①仕事の概要、プロの技術、専門性の理解

3, 4, 5, 7, 8, 11, 15, 16, 19, 23, 25, 27, 29, 32, 34, 36, 38, 41, 43, 44, 45, 46, 48, 53, 54, 56, 57, 60, 62, 63, 81, 98

②仕事にはいくつかの段階・側面があることの理解およびイメージとの差異

2, 5, 39, 41, 49, 54, 56

C. 「職場・組織に対する認識・評価」

①職場・組織が複数の人間の存在により成立していることの認識

1, 4, 9, 10, 16, 18, 20, 21, 22, 25, 28, 29, 31, 33, 55, 59, 65

②仕事が複数の部門や組織で行われていることの認識

15, 33, 36, 57, 59, 60

③職場・組織の特性の認識・評価

6, 42, 52, 67

D. 「社会に対する認識・再認識・評価」

①社会の中のさまざまな人間の存在および社会の問題の認識

29, 47, 50, 51, 56, 63

②学校や家庭と違う世界の認識、意識化

13, 14, 40, 42, 43, 47, 50, 51, 52, 55, 56, 61, 62, 63, 67

E. 「自己に対する評価・発見・理解」

①進路・キャリアに関する方向性の明確化

14, 26, 35, 37, 41, 42, 46, 48, 52, 54, 59, 62, 65, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 84, 85, 86, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 100

②自己の行動、意識の評価・反省

10, 32, 37, 39, 47, 50, 51, 53, 56, 61, 64, 80, 84, 87, 91, 93, 95, 97, 99

③生き方に関する方向性の明確化

36, 42, 49, 51, 52, 56, 61, 63, 83, 90, 91, 97, 101

見てわかるとおり、「仕事する人」から「自己」、「仕事・職業」から「自己」、「職場・組織」から「自己」、「社会」から「自己」という視点があることは明らかである。また、方向性が「自己」だけに向かっているとは限らず、「仕事・職業」から「自己」そして「社会」へと向いている場合もある。したがって、次に一連の流れから感想文を読むことを通して、どのように「自己」とその他の4つの視点の関係しているのか、またどのような構図が出来上がっているのかを見ることで最終的に同校におけるインターンシップの有効性を明らかにする。今後は「自己」との関係を「仕事する人」－「自己」、「仕事・職業」－「自己」、「職場・組織」－「自己」、「社会」－「自己」と現し、「－」の前後は順序性をあらかずものでないことを断っておく。

(1) 「自己」と他の4つの視点との関係

①「仕事する人」～「自己」の関係

ここでは「仕事する人」と「自己」との間に関係がある感想文を具体的に取り上げ、見ていくことにする。まず関係があったのは通し番号で 32, 48, 50, 51, 61, 64, 69 の生徒の感想文である。

32 ととてもなごやかで、緊張していた私にいろいろ気を遣って下さり、また、自己紹介する前にフルネームを覚えて下さって、感激したと同時に、カウンセリングという人と接する仕事もされてい

ることだけあって、さすが意識が違うなど、自分の考えの甘さが恥ずかしく思えた。

(大学カウンセリング研究所体験の女子生徒)

48 何よりもまず自分の心構えが大切だと思いました。なぜこの職業を選んだのかと聞いたら、自分が一番苦手なものだったから、とおっしゃっていた人がいたのですが、そうやって苦手なものをあえてやってみるといふこともあるのだなと思いました。(環境保全研究所体験の女子生徒)

50 障害者の人達は、成人したらどのような生活を送っているのか、私は今までよく理解していませんでした。今回の体験学習で「こころみ学園」に行って、そこで生活している人達の働きぶりなどを見て、健常者も障害者もそんなに変わらないと思った。確かに作業効率は悪かったりするかもしれないが、働くことに精一杯取り組んでいた。私がそう思ったのは、心のどこかで、障害者の人達に対して偏見を持っていたのだと思う。この間違いに気付いてよかった。

(精神薄弱者訓練施設体験の女子生徒1)

51 緑豊かなこころみ学園に行って私は人間本来の生活や生き方を見直すことができた。日本に限らず世界の国々は経済の発展にばかり注意を払っているが、今私達がすべきことは木を植え作物を育て緑を増やすことだと思った。このような考えを持つことができたのも、こころみ学園の園長さんのお話を聞くことができたおかげだと思う。世の中の便利さを追求するあまりに人間が長い間自然の中で生きてきた事をすっかり忘れていることに気付いた。

(精神薄弱者訓練施設体験の女子生徒2)

61 国際協力について自分にとって以前よりも身近なものに感じられるようになった。JICAで働く人は人の役に立っている。助けてあげていると考えるのではなく、そうすることによって自分を知り向上できる機会だと考えるそう。同じ人間として困っている時は手を差し伸べよう。実際に輸入輸出面でもお互い支え合って生きていることなど忘れがちであるが、この大切なことを気づかせてもらった。

(国際協力事業団体験の女子生徒)

64 嫉妬と同性愛についての講義を受けた。両方とも昔からあった問題で、嫉妬があるから人間は繁栄したという話に深く驚きを覚えた。大学生の話1つ1つに驚き、感動そして新鮮さを感じた。自分の世界が広がった気がした。

(大学カウンセリング研究所体験の男子生徒)

69 今まで、日本国憲法にあるように「権利」であり「義務」であると思っていた。生活に必要なお金を稼ぐことだと思っていた。しかし、生き生きと仕事をしているスタッフを見て、そんな言葉だけで片付けられるものではないと思った。社会での自分の行動には、いつも責任が付きまとう。でも、だからこそ仕事をし、働くことによって、自分の社会における存在を感じられるのではないと思う。

(情報誌出版社体験の女子生徒)

32の生徒はカウンセリングの先生の対応と、その仕事について考えさせられ、自分の考えの甘さに気づき、自己の行動の反省をしている。48の生徒は仕事の選択の仕方を他者から学び、進路・キャリアに関する方向性を明確にしている。50の生徒は障害者の人が「精一杯取り組んでた」と見ていた自分を評価し、そういう見方自体が偏見であることに気づいている。51の生徒は園長さんのお話を聞くことで働く姿勢を理解し、そこから「社会」を見ることが可能となり、最終的には自己の生き方を考えるまで至っている。61の生徒も働く人の姿勢、考え方から「仕事」や「社

会」を見ており、国と国との協力および人間として困っている人を助けることが大切だということを見直し、改めて再認識している。64の生徒は講義や大学生の話聞くことで驚き、感動し、新鮮さを感じており、新しい世界を発見し自分の世界を広げていると考えられる。69の生徒は頭だけで学習した労働という理解を「生き生きと仕事をしているスタッフを見て、そんな言葉だけで片付けられるものではないと思った。」と生の働いている人の姿を見て感じている。その結果『権利』であり『義務』であると思っていた。生活に必要なお金を稼ぐことと外面的な捉え方をしていた生徒が「社会での自分の行動には、いつも責任がつかまとう。でもだからこそ仕事をし、働くことによって、自分の社会における存在を感じられるのではないかと思う。」という表現からは働くことと「自己」との関係を理解したことが読み取ることができる。

したがって、「仕事をする人」を対象としている生徒の視点は「働き方や働く姿勢の観察や評価」を短い時間的に的確に行い、かつ「働く人に対する思い」を抱くことも可能で、その後、自己と他との接近、置き換え、自己内対話、自己反省・評価が見られる。

以上より、同校の生徒の感想文からインターンシップには「仕事をする人」－「自己」という視点の関係があることが明らかとなった。

## ②「仕事・職業」－「自己」の関係

ここでは「仕事・職業」と「自己」との間に関係がある感想文を具体的に取り上げ、見ていくことにする。まず関係があったのは通し番号で32,36,39,41,46,48,49,53,54,56,62,81,98の生徒の感想文である。ただし、32,48の生徒は「仕事する人」－「自己」にあるので省く。

36 会社にはいくつかの部門(機関)があって、それらはそれぞれの働きと、つながりを持っている。従ってその中の一つでも欠けてしまうと他にも影響を及ぼし、会社は成り立たない。このことは、会社だけではなく、他社の車の作りなども勉強して知っておく必要があるという大変さを感じた。また、人間関係の難しさ、重要さがわかった。(自動車販売店体験の女子生徒)

39 上司に怒られてもくじけない事が必要である。立派に働くためには、自分にはまだまだ時間が必要だと思う。(家電販売店体験の男子生徒)

41 栄養士という仕事は入院患者の食事を作っているだけかと思っていたら、患者とのコミュニケーションをすごく大切に、患者との様々な面であふれていることを知りました。看護婦さんの仕事は、体力を必要とする職業であることが、1日の体験実習を通して実感した。そして看護婦さんは患者さんの病気を治す手助けをするだけでなく、患者さんの相談相手やおしゃべり相手になるなどの精神面のケアも大切な仕事だとわかった。(個人病院体験の女子生徒)

46 建築業という仕事は非常に厳しいもので、どんな小さな間違いも許されないということ。しかし、そういう厳しさがあるからこそ、やりがいがあるのだということ学んだ。自分の好きな仕事に就き、一生懸命に働くことは、素晴らしいことだと思った。(建築会社体験の男子生徒)

49 はじめから自分が思っているような仕事はできなくて、最初は裏方のような仕事から始めることが分かった。だから我慢が必要だと思う。社会人になったとき、何事にも我慢できる忍耐力をつけたいと思う。(県国際交流協会体験の男子生徒)

53 幼稚園という場所は「教え込む」のではなく、「自然に覚えさせる」ことをしている。子供が初

めて家の中の生活から外に出ての生活に変わる場所であり、自分がまわりに育てられてきたのだから、と実感が湧いた。  
(幼稚園体験の男子生徒)

54 一つの仕事のプロになるにはものすごい努力と根性がある。特に相手が動物である場合、やさしさと厳しさとで沢山の経験をさせ、教え込む。一つの職業で生活していくためには、楽しいとか好きだとかだけではなく、多くの犠牲もあることを知った。  
(警察犬訓練所体験の女子生徒)

56 市役所の仕事をしていて一番辛いことは、住民の苦情を聞くことだそうです。僕も最初はあまりいいイメージを持っていなかったのですが、実際に見学してみると、住民の人が納得いかないようなところは条例の制約があったり、それ相当の理由があり僕たちはあまりにもこの仕事に対しての理解が浅かったと思いました。人間関係を維持していくにはお互いの理解が必要だと思いました。  
(市役所体験の男子生徒)

62 JICAのしている仕事は特別なことではなく当たり前のことである。なぜなら日本も世界の国の援助がなければ、こんなに豊かな生活はできないから。JICAがボランティアという言葉を使わない理由がわかった。「言葉よりも生活にとけ込む」事が大切だというのが、やはりコミュニケーション能力を高めるためにも英語学習は大切である。精神的な手助けが必要なのはむしろ日本人スタッフの方で現地の人に言葉や基本的技術等支えてもらっている。  
(国際協力事業団体験の女子生徒)

81 この体験学習を通し、接客の難しさがわかった。でも人と接する仕事に就きたい。  
(百貨店販売体験の女子生徒)

98 今回の体験を通して一層銀行員になりたいと思った。確かに仕事は地味かもしれないが、お金を扱うことの責任や重要さというものがわかり、逆に働く意欲みたいなものが湧いてきた。仕事にやりがいがあると思った。  
(信用金庫体験の男子生徒)

36の生徒は「会社にはいくつかの部門(機関)」があることとそのつながりがあることに触れ、まず「職場・組織」を見ているが、そこから「他社の車の作りなども勉強して知っておく必要があるという大変さを感じた」と仕事に対する心構えや大変さへと視点を移していることが分かる。39の生徒は、仕事をする上で「上司に怒られる」ことは当たり前で、「くじけない事」の必要性、重要性を感じている。その上で、「立派に働くためには、自分にはまだまだ時間が必要だと思う。」と自己に対してその能力が不十分であることを認識している内容である。41の生徒は病院の中で栄養士と看護婦の複数の仕事を理解している。また、その中でも「入院患者の食事を作っているだけかと思っていたら、患者とのコミュニケーションをすごく大切にし、患者との様々な面でふれあっていることを知りました。」や「看護婦さんは患者さんの病気を治す手助けをするだけでなく、患者さんの相談相手やおしゃべり相手になるなどの精神面のケアも大切な仕事だとわかった。」と自分の中にあった仕事内容との差異に気づき、仕事の持つ意味を含め、より深くその職業を理解していると考えられる。46の生徒は「建築業という仕事は非常に厳しいもので、どんな小さな間違いも許されないということ。」と仕事の持つ意味や重要性を理解している。また、その中から「しかし、そういう厳しさがあるからこそ、やりがいがあるのだということ学んだ。自分の好きな仕事に就き、一生懸命に働くことは、素晴らしいことだと思った。」と仕事のやりがい

や働くことの素晴らしさを発見している。53の生徒は幼稚園での主な仕事は『『教え込む』のではなく、『自然に覚えさせる』ことをしている」ととらえ、その理解から「子供が初めて家の中の生活から外に出る生活に変わる場所であり、自分がまわりに育てられてきたのだな、と実感が涌いた。」と自分を取り巻く家族、社会を見る視点を持ち、また感謝の念を抱いたと考えられる。98の生徒は「今回の体験を通して一層銀行員になりたいと思った。確かに仕事は地味かもしれないが、お金を扱うことの責任や重要さというものがわかり、逆に働く意欲みたいなものが湧いてきた。仕事にやりがいがあると思った。」との感想であり、46の建築会社体験の男子生徒と同様の内容と捉えられる。仕事内容と同時に仕事の持つ意味や重要さ、大変さがわかったことで自分と仕事との距離が明確に把握できたことで「逆に働く意欲みたいなものが湧いてきた。」という積極的な気持ちに繋がったのではないかと考えられる。

したがって、「仕事の概要」や「仕事の大変さ」、「仕事に必要とされる適性」、「専門的技術」などの「仕事・職業」を純粋に見るとすることは「自己」の既持っている仕事内容や職種へのイメージとその差異を明確にすることが可能である。そして、今まで知らなかった内容や発見等を自分の中に取り入れようとしていると考えられる。また、職種についてより深く知ったことで「仕事」と「自己」との距離が明確になり、進路やキャリアに対する意識の高まりが見られる生徒の感想文もあった。

以上より、同校の生徒の感想文からインターンシップには「仕事・職種」－「自己」という視点の関係があることが明らかとなった。

### ③「職場・組織」－「自己」の関係

ここでは「職場・組織」と「自己」との間に関係がある感想文を具体的に取り上げ、見ていくことにする。まず関係があったのは通し番号で10,36,42,52,59,65,67の生徒の感想文である。ただし、36の生徒は「仕事・職業」－「自己」に、42の生徒は「社会」－「自己」にあるので省く。

- 10 とてもやさしくゆったりした人が多く、和やかな雰囲気では自分は他の人に優しいだろうか？と考えさせられた。  
(精神薄弱施設体験の女子生徒)
- 52 職場にはとても大切なルールがあって、それは絶対に守らなければいけないものと思った。また、働くということは、とてもつまらないものだと思っていたが実際に働いてみると、案外おもしろいものだということが分かった。そして、社会で生きていくには、人間と人間のつながりがとても大切だということも分かった。  
(食品製造業体験の男子生徒)
- 59 一つの職場は色々な役割を持ったたくさんの人々で成り立っている。大学はそれぞれに特徴があり、選ぶ際はよく考える必要がある。  
(大学法学部体験の男子生徒)
- 65 人との出会いの場であり人との優しさにも厳しさにも触れることができる場でもある、現代というものを知るための近道の手段のようなものと思う。  
(家電販売店体験の男子生徒)
- 67 「働く」ということは、守らねばならない期限があったり、失敗が許されなかったりするもので、学校生活より厳しい世界であると思った。  
(旅行代理店体験の男子生徒)

10の生徒は一人一人および複数の人々が醸し出す職場の雰囲気を感じており、そこに身を置くことで「自分は他の人に優しいだろうか？」と自己内対話が行われている。59の生徒は「一つの

職場は色々な役割を持ったたくさんの人々で成り立っている。」と仕事が複数の部門や組織で行われていることを認識している点では36の生徒と同様である。また、「大学はそれぞれに特徴があり、選ぶ際はよく考える必要がある。」と大学という組織をとらえる視点が明らかになっている。52、67の生徒は「職場」や「働く世界」における特性を認識し、そこから働くことを体験したことで、「働くということは、とてもつまらないものだと思っていたが実際に働いてみると、案外おもしろいものだということが分かった。」と自己に対する認識が生まれている。また、「失敗が許されなかったりするので、学校生活より厳しい世界であると思った。」という感想からは自己の生活する場(学校生活)と比較し、違う世界であると認識していることが読み取れる。65の生徒は働く場を「人との出会いの場」、「現代というものを知るため」の手段としており、職場・組織を社会の一部と見るとともに、社会を見る一つの視点として職場・組織があるという考えを示している。

以上より、「職場・組織」を見ることによって、「自己の行動、意識の評価・反省」や「進路・キャリアに関する方向性の明確化」、「生き方に関する方向性の明確化」が生徒の感想に現れた。

このことにより、同校の生徒の感想文からインターンシップには「職場・組織」－「自己」という視点の関係があることが明らかとなった。

#### ④「社会」－「自己」の関係

ここでは「社会」と「自己」との間に関係がある感想文を具体的に取り上げ、見ていくことにする。まず関係があったのは通し番号で14,42,47,50,51,52,61,62,63,67の生徒の感想文である。ただし、50,51,61は「仕事する人」－「自己」、62は「仕事・職業」－「自己」、52,67は「職場・組織」－「自己」にあるので省く。

- 14 仕事の大切さ、手抜きを해서는いけないということを知った。大人になったらこういう社会の中でやっていくのだなあと思いました。(航空機の機体・部品製造業体験の男子生徒)
- 42 慣れてしまったら何ともなくなるのかもしれないが仕事を毎日やるというのは、本当に大変で責任があることだと思う。友達同士でも会社の同僚でも良い人間関係を作ることが仕事を楽しくも辛くもするのだと学んだ。(個人病院体験の女子生徒)
- 47 社会の中では私たち子供の常識は全く通用しないこと。現在では一人一人の生活環境による汚染が進行していることから、私も生活を見直す必要があると思った。また、人々の環境に対する考え方を変えていくことも必要だと思った。(環境保全研究所体験の女子生徒)
- 63 表で活躍している人の裏には、必ずそれを支えている人がたくさんいるということが分かった。そしてその人達のおかげで、会社(社会)というものが成り立っているんだということを実感した。今までの国際協力はどうしても国と国との巨大プロジェクトが多かったが、これからは人と人との草の根レベルで国際協力が重要視されてくるということを知った。(国際協力事業団体験の男子生徒)

14の生徒は仕事を見ながら、仕事の大切さを知り、そして「大人になったらこういう社会の中でやっていくのだなあと思いました。」と「社会」を見ている様子がわかる。そこでは自己の見ている社会でいずれ自分が生活していくことへのうっすらとしたイメージが描かれていることが想像できる。42の生徒も14の生徒と同様仕事の視点から仕事の大変さ、重さを感じている。そし

て毎日の生活を送る上で出は良い人間関係を作ることが重要であるという「生き方に関する方向性」を見出している。47の生徒は自分を子供として扱い、そこから「社会」を見る視点から自己の世界を評価している。また、「現在では一人一人の生活環境による汚染が進行していることから、私も生活を見直す必要があると思った。」と社会状況を認識する中から自己反省が生まれている。そして、最後には今後社会全体の考え方を変えていく必要性に触れ、社会の問題に対して考察する視点をもった。63の生徒は社会の中の様々な人を見ており、その中でも「表で活躍している人の裏には、必ずそれを支えている人がたくさんいる」ことを理解し、人と人、会社と会社、社会と社会(国と国)などのそれぞれのレベルで協力が大切であることを学んでおり、一人一人の人間の偉大さや大切さに気付いている。

以上より、生徒は「社会」を見ることよって、「自己の行動、意識の評価・反省」や「生き方に関する方向性の明確化」等を示す感想文を書いていることがわかる。

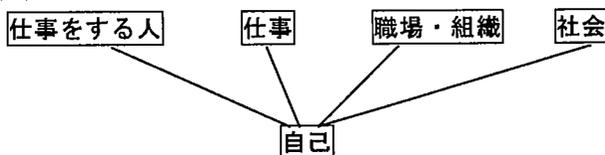
このことにより、同校の生徒の感想文からインターンシップには「社会」－「自己」という視点の関係があることが明らかとなった。

## (2) 「自己」と他の4つの視点の構図

今まで述べてきたことより、インターンシップは、自己以外の外的なものを体験することであるから、「仕事をする人」、「仕事」、「職場・組織」、「社会」、「自己」の5つの視点を提供する。そして同時に、これらの関係は基本的に「仕事をする人」、「仕事」、「職場・組織」、「社会」の4つの視点から「自己」へと一方向へ向かうものである。

したがって、「自己」と他の関係は、次のようになっていることが明らかとなった。しかし、「自己」へ向かっての一方向だけのものではなく、場合によっては何度か往復する例があることも予想される。

栃木県立石橋高校の生徒の視点の関係構図



上記の構図について、それぞれ簡単に説明を加える。まず、「仕事をする人」－「自己」の関係について、生徒が、他を見るという行為は、客観的に人の動作や人間性の評価を行うと同時に、自己の外側からの情報として自己の中に取り込む。また、憧れや感動、感心するといった感情も合わせて抱えていることがわかり、そこで生徒は自己を他者と対比させ、あるいは置き換えるなどの活動が行われていると考えられる。したがって、「仕事をする人」－「自己」という視点の関係から自己の世界を外側からと内側から広げていると考えられる。

次に、「仕事」－「自己」の関係についてである。生徒は実際に仕事を見て、あるいは仕事に触れて「仕事にはいろいろな段階や側面」があることを知り、生徒は自己の中に持っていた「仕事」認識と実際の対比が行われるのである。したがって、ここでは今までの仕事認識と、実際の仕事の差を理解しており、そのことで自己の仕事に対する適性なども把握していると予想される。したがって、「仕事」－「自己」との視点から自己の世界を外側からと内側から広げていると推察される。

「職場・組織」－「自己」については、職場・組織を社会の一部と見るとともに、複数の人々が醸し出す職場の雰囲気から社会を感じており、そこで自分が働くあるいは生活するイメージが

生まれている。また、良い人間関係の重要性や自分に欠けている能力の認識や、自己の生活する場(学校)と「働く世界」との違いを認識するなど、「職場・組織」－「自己」の視点から自己の世界を広げていることがわかる。

最後に、「社会」－「自己」についての関係である。生徒は社会をどのように見るかは様々であり、自己を社会の一員としてみているか、外部としてみているかという視点がある。また、外部の場合は現時点で見ているか、あるいは将来をイメージしているかでも違って来る。しかし、どのような見方をしても「社会」から「自己」へ、または「自己」から「社会」という視点を持つと同時に、そこから自己の世界を広げていると推察されるのである。

以上、栃木県立石橋高校の生徒の感想文分類を行った結果、インターンシップは「仕事をする人」、「仕事」、「職場・組織」、「社会」、「自己」を見るという5つの視点を持つことが明らかとなった。そして、「自己」と他の4つの視点の関係の構図が明確になり、その関係こそが筆者のインターンシップの有効性を見る軸とした「自己をより深く知る力」と「自己の可能性を広げる力」を育成することになり、上記の関係の構図は高校生の「自己・他者・物」の関係を編み直すことになるのは明らかである。

したがって、普通科高校におけるインターンシップは生涯学習能力形成要素の「自己実現能力」を高校生に身に着けさせ、かつ「学び」論において、有効であるということが言えたのである。

## 終章 まとめ(インターンシップの有効性)

ここで本論のまとめを行う。まず、第1章では、高校生に欠けている力、高校生が必要とする力の考察より、「学び」論の視点からインターンシップを捉えることとした。そして、「学び」とは自己、他者、対象の3つの関係を編み直す活動と再定義し、本論の課題を、インターンシップが高校生に「学び」を提供できるのかを検証することとした。

第2章では、本論の課題をより具体化するために、高校生における「学び」というものを、自己の輪郭を探索し形づくりの活動として、高校生が最も必要とする力を「自己をより深く知る力」、「自己の可能性を広げる力」と捉えることにした。この2つの力を、インターンシップの有効性をみる軸とし、本論の課題を再設定した。それは、高校生がインターンシップによって、「自己をより深く知る力」と「自己の可能性を広げる力」の2つの力を獲得することができたか、を検証することである。

そして、そのためには生徒の内面を見る必要があり、インターンシップを体験した生徒の感想文を分類するという方法と、自己と他者、物などの関係がどうなっているかを見るという枠組みを提示した。

課題を検証する第3章では、生徒がインターンシップを通して何を見て、何を学んでいるのかを明らかにするため、栃木県立石橋高等学校の生徒101人分の感想文を実際に分類した。具体的には、生徒の言葉や表現は多岐に渡っており、多面的な意味も含んでいるので、筆者が一度分節化し、帰納法的に分類するという方法をとった。

それによれば、分類項目は全部で12に分かれたが、それを生徒の視点から大きく括り直すと、次の5つに分けることができた。

1. 「仕事をする人(個人)に対する姿勢や生き方への評価」
2. 「仕事・職業についての理解・発見・確認」
3. 「職場・組織に対する認識・評価」
4. 「社会に対する認識・再認識・評価」
5. 「自己に対する評価・発見・理解」

つまり、同校の生徒の感想文分析より、インターンシップは生徒に「仕事をする人」、「仕事」、「職場・組織」、「社会」、「自己」の5つの視点を持たせることが明らかになったのである。

さらに、それらの中で、「仕事をする人」、「仕事」、「職場・組織」、「社会」の4つと「自己」とが相互に関係を持っていることを明らかにした。具体的には「仕事をする人」を観察したり、「仕事」を実際に行い、「職場・組織」や「社会」を意識することで、「自己」というものを深く見つけ直すという、「仕事をする人」－「自己」、「仕事」－「自己」、「職場・組織」－「自己」、「社会」－「自己」という視点の関係構図が見られたのである。つまり、この構図は自己の世界を、内側と外側の両面から広げていると推察されるのである。

この点について、筆者が同様に調査・分類した小樽明峰高校の感想文(レポート)分析からも同様の結論が得られている。小樽明峰高校は進路先が就職や専門学校、大学への進学など様々で、石橋高校とは対称的な進路多様校である。その中で授業科目の一つとして通年行われるインターンシップを実施する形態でありながら、石橋高校で見られた「自己」と「仕事をする人」、「仕事」、「職場・組織」、「社会」の視点の構図が見られたのである。しかし、紙幅の関係でここでは小樽明峰高校の感想文分析は割愛する。

本論は、「学び」の定義を自己、他者、対象の3つの関係を編み直す活動とし、そのために必要な力を、「自己をより深く知る力」と「自己の可能性を広げる力」の2つに分けた。そして、インターンシップを体験した、生徒の感想文分析を行った結果、生徒は「仕事をする人」、「仕事」、「職場・組織」、「社会」、「自己」の5つの視点を獲得し、さらに「自己」と他の4つの視点の関係構図が明確になったのである。

つまり、生徒(自己)には、「仕事をする人」や「職場・組織」、「社会」の人達という他者との関係を捉え直し、「仕事」や「職場・組織」、「社会」の中の物、文化に触れることで、対象との関係を新たに構築していくという内的行為が見られたのである。そこでは、自己というものを深く捉え、自己の輪郭を探索し、形づくる活動が行われていたと考えられる。

したがって、インターンシップは、生徒に「自己をより深く知る力」と「自己の可能性を広げる力」を育成することが明らかとなったのであり、結論として、普通科高校におけるインターンシップは、生徒が必要とする「学び」に有効であるということが示されたのである。

換言すれば、普通科高校におけるインターンシップとは、自己・他者・対象の「学び」に有効であり、「仕事をする人」、「仕事」、「職場・組織」、「社会」を学びながら「自己」を深めるように実施されなければならないのである。

最後に、筆者は、「今後、インターンシップ論の概念整理が必要である」と序章で指摘した。それは、今後ますます現場で実践されていくと考えられるインターンシップが、意義あるものとして発展させるためには必要不可欠と感じたためであり、本論文がその一助となることを願いたい。

[付記] 本稿は、平成15年1月に北海道大学大学院教育学研究科に提出した修士論文「普通科高校におけるインターンシップ(就業体験)の事例研究とその課題」の一部に加筆・修正したものである。

- 1 1997年1月24日「教育改革プログラム」、1997年5月閣議決定「経済構造の変革と創造のための行動計画」。
- 2 文部科学省によれば、2002年度のインターンシップの実施状況は公立高校では普通科32%、職業科74.1%となっている。
- 3 北海道教育委員会「平成14年度 北海道の教育施策」、「平成15年度 北海道の教育施策」。
- 4 佐々木享「歴史的経験からみた日本におけるインターンシップの諸類型—初等・中等教育を中心に—」教

- 
- 育科学研究会第41回大会での発表原稿、2002年8月。
- 5 調査したのは栃木県立石橋高等学校、福島県立坂下高等学校、群馬県高崎市立高崎経済大学附属高等学校、兵庫県立豊岡南高等学校、小樽明峰高等学校の公立4校、私立1校の計5校である。
  - 6 その他に「学校の理念、目的が明確であり、生徒の実態に沿って教育課程に位置づけられていること」、「教員の内発性が重要であること」、「特定の教員、分掌などに負担がかかることの無いように学校内での協力体制や仕組みが必要であること」、「インターンシップの質の管理をするという学校の役割分担が必要であること」、「行政や地域・社会と学校との接続、連携、協力体制等が必要であること」の5点を実施条件とした。
  - 7 新井郁男「生涯教育・生涯学習の系譜と教育経営」日本教育経営学会編『シリーズ 教育と経営 4巻 生涯学習社会における教育経営』玉川大学出版部、2000年、17頁。
  - 8 高橋輝「自己実現と生涯学習—価値の多元化・個性化・統合化」日本教育経営学会編『シリーズ 教育と経営 4巻 生涯学習社会における教育経営』玉川大学出版部、2000年、35-36頁。
  - 9 ユネスコ21世紀国際委員編『学習—秘められた宝 ユネスコ21世紀国際委員会報告書』ぎょうせい、1996年、66-76頁。
  - 10 高橋輝「自己実現と生涯学習—価値の多元化・個性化・統合化」日本教育経営学会編『シリーズ 教育と経営 4巻 生涯学習社会における教育経営』玉川大学出版部、2000年、37頁。
  - 11 高橋輝 前掲書、36頁。
  - 12 佐藤学「学びの対話的実践へ」佐伯胖・藤田英典・佐藤学編『学びへの誘い』東京大学出版会、2000年、49頁。
  - 13 佐藤学 前掲書、51頁。
  - 14 佐藤学 前掲書、51-52頁。
  - 15 佐藤学 前掲書、72頁。
  - 16 早川操『デュイの探求教育哲学—相互成長をめざす人間形成論再考—』名古屋大学出版会、1994年、2頁。
  - 17 竹内常一『子どもの自分くずしと自分づくり』東京大学出版会、1993年、59-60頁。
  - 18 佐藤学「学びの対話的実践へ」佐伯胖・藤田英典・佐藤学編『学びへの誘い』東京大学出版会、2000年、51頁。
  - 19 佐藤学 前掲書、72頁。
  - 20 栃木県立石橋高等学校作成の「平成12年度学校運営・教育計画」、26頁。
  - 21 栃木県立石橋高等学校作成の「平成12年度学校要覧」中の平成11年度卒業生の進路状況。
  - 22 栃木県立石橋高等学校作成の「平成9年度体験学習報告書」、目次。
  - 23 栃木県立石橋高等学校 前掲書、222頁。
  - 24 栃木県立石橋高等学校 前掲書、223頁。
  - 25 栃木県立石橋高等学校 前掲書、223頁。

## 資料 平成9年度栃木県立石橋高等学校「事業所体験」の生徒の報告書(感想文)

「職場の人達の働きぶりはどうでしたか。」と「職場の雰囲気はあなたはどう感じましたか。」についての同校生徒32人の感想(※10、14、32の生徒の感想文は本文中にあるので省略)

- 1 職場の人、一人一人が自分が受け持っている仕事をしっかり行い、研究開発のことにに対して努力を惜しんでいないように見えました。職場内では人と人との間に隔たりのようなものが全然存在せず、いつも和やかな環境の中で仕事を行っているという印象を受けました。  
(農業試験場体験の男子生徒)
- 2 普段見ない裏方の仕事をしている人達を見学し、見えない所では大変だと思った。1日中たったままなのに元気だった。  
(百貨店販売体験の男子生徒)
- 3 とても手際が良く、素早くてしかも正確に仕事が行われていて、接客の面でもお客さんの立場にたってお客さんが最も良い買い物ができるように適切なアドバイスをしていた。  
(百貨店販売体験の男子生徒)
- 4 管理栄養士と栄養士、調理師、調理員がお互いに協力して仕事をしていた。一度に何百人もの食事を作らなければならぬので、すごく素早く、能率良く働いていた。病院の食事作りということで、衛生面と栄養価の両方にかかり注意を払っていた。  
(個人病院体験の女子生徒)
- 5 食事のメニューを考えたりするだけでなく患者さんの所へ直接行って、コミュニケーションをとったり、一緒にレクレーションをしたりしていた。  
(個人病院体験の女子生徒)
- 6 職場というのは、学校の延長ではなく、自分の責任が多くなるが、自分の能力を発揮できる場所で誇りを持って働ける所だと分かりました。  
(精密機械製造会社体験の男子生徒)
- 7 体全体で全力で自分の気持ちをぶつけてくる子供たちに自分も全力でぶつかっていくのではなく力の抜き方を知っていて緩急をつけて上手に対応している。  
(幼稚園体験の女子生徒)
- 8 直接カウンセリングしている所は見せてもらえなかった。それも、秘密厳守のためであるそう。クライアント(悩みを持つ人)との秘密は絶対で、時間も必ず守るそう。そういう面で、かなりいろいろな面に配慮を必要とする仕事であり、徹底している仕事であると思った。  
(大学カウンセリング研究所体験の男子生徒)
- 9 とても緊迫していた。学校も一つの社会というが、全く違う世界だと思った。  
(新聞支局体験の男子生徒)
- 11 甲冑修理の小沢さんはこの道何十年という方で、とても甲冑が好きでその仕事ぶりはとてもすごいものでした。もの修理というのがどれだけ鍛錬されたもので、職人芸であるか分かりまし。  
(国立博物館体験の女子生徒)
- 12 研究室では、生活に直接関係していることを研究していて、その説明を聞いてみると、自分の実験の意義を完全に把握しているようだった。  
(工業大学工学部、電気・電子工学科体験の男子生徒)
- 13 一人一人が自分のやるべき仕事を確実にこなしていた。学校と違って一人一人が社会人として大きく見えた。  
(新聞社体験の男子生徒)
- 15 正確さを要求される作業で、とても真剣で熱心だった。手際の良さはさすがプロだと思った。それに仕事をする上で何事もけじめをきっちりつけていた。航空機を作る上でミスは許されないという点では、緊迫していると思った。でも、とても充実しているように感じた。材料を選ぶのに自動のロボット車を使っていたりして、工場そのものがハイテクで機械的な感じがしたが、一方で手作業のところもあって、人間味があるというか、不思議な気もした。  
(航空機の機体・部品製造業体験の男子生徒)
- 16 ホームステイをする人が気を遣わないような普段のままでも、とても楽しく和やかな雰囲気でした。ホームステイは短い期間だけれど、家族全員ができるだけ楽しく過ごせるように明るく振る舞っていた。  
(ホームステイ受入家族を見た女子生徒)
- 17 外国人にとっても丁寧に、日本人としての誇りを持って接していた。明るく振る舞ったり、気を遣ったりして外国人に接していて、大変そうだったが、とても生き生きしていた。  
(ホームステイ受入家族を見た女子生徒)
- 18 若い人から年輩の人までが同じ所で働いているにもかかわらず、すごく和んでいたように感じました。また、作業中はみんなすごく真剣で、自分のやるべき事に集中しているように感じました。  
(個人病院体験の女子生徒)

- 19 患者さんがたくさん入院しても、看護婦さんは患者さん1人1人の病状を把握していて、すごいと思った。  
(個人病院体験の女子生徒)
- 20 栄養士が自分より年上の調理師の人にいろいろと指示を出したりしていることも多くあるので、そういうときは大変そう  
だと思った。今はコンピューターを使うようになったらしく計算(カロリーや栄養値・業者に注文する量等)が楽になったとい  
っていたがいろいろな表をつくること自体が難しそうだった。  
(個人病院体験の女子生徒)
- 21 明るく楽しい雰囲気の中に、忙しさや大変さ、厳しさがある。1人1人の意見が尊重される温かい雰囲気があった。  
(情報誌出版社体験の女子生徒)
- 22 とてもなごやかで、良い雰囲気だったと思います。外国人の方々とのスムーズに交流できそうな空間が作られていたと思  
うし、誰でも受け入れてくれるようなそんな温かい雰囲気だったと思います。(県国際交流協会体験の女子生徒)
- 23 先生方は、踊りの時も子供達と一緒に楽しそうに踊っていた。私たちは恥ずかしがってしまって、堂々と踊れなかった。  
やはり、先生はすごいと思った。  
(幼稚園体験の女子生徒)
- 24 朝私たちが従業員入り口を入ったときから、制服を着ている私たちにためらいもなく「おはようございます」と大きな声  
で声をかけてくださった事にまず驚きました。また、その後も店内そしてバックルームでも活発に挨拶が交わされていて、誰  
もが仕事に積極的に取り組んでいるように見えました。さらに、従業員全員が自分の役割、やるべき事をしっかり理解し、怠  
けることなく仕事をこなしているようでした。また、私たちがどうしたらよいかわからずに困っていると、歩み寄ってきて  
いろいろと手伝って下さいました。  
(百貨店体験の男子生徒)
- 25 当初、職場を堅苦しい所と思いこんでいたが、意外にも明るく和やかな雰囲気だった。展示ケースの清掃のため、陳列品  
を取り出す際の一連の動作はとて慎重で、そばで見ている飲み込まれそうなくらい張りつめた空気が漂っていた。  
(国立博物館体験の男子生徒)
- 26 日本のあちこちの美術館や博物館にできるだけ勤めたい。日本だけでなく、海外の美術館・博 物館で勉強してみたい。  
(国立博物館体験の男子生徒)
- 27 とても忙しそうで、お客さんからのクレーム等もあり仕事の厳しさを味わった。(旅行代理店体験の男子生徒)
- 28 裁判所は緊張感が漂っていて、しかも全ての人々が厳肅な態度で働いていた。一生懸命で公平な態度に感動した。雰囲気に  
飲まれて、何もかもに圧倒された。緊張感が伝わってきてすごいと感じた。はなされている内容はほとんどわからなかつ  
た。  
(法律事務所体験の男子生徒)
- 29 自分たちが普段生活している場所と違って、裁判所などは、一歩足を踏み入れると、全く空気が違うと感じた。一人の人  
間が、人や企業の罪を決め、その判決により、人生が変わってしまったり、企業が何億円という賠償金を支払わなければ  
ならなかったりするだけに、裁判官も、弁護士も、検察官も、皆真摯に働いていた。(法律事務所体験の男子生徒)
- 30 大学の先生は教える気が充分にあった。授業は先生と学生が一緒になってより良くしようとしていた。  
(大学法学部体験の男子生徒)
- 31 自分の意見や気持ちを素直に話すことができるような雰囲気であった。ゼミでは、思ったことを全て出し尽くして話し  
合い、楽しく感じることが多かった。  
(大学カウンセリング研究所体験の女子生徒)

「今回の体験学習で、いままで知らなかった事に様々な気づいたことと思います。具体的に書いてください。」

と「今回の体験を通して、学び得た事などを書いてください。」についての同校生徒32人の感想

(※36, 39, 41, 42, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 56, 59, 61, 62, 63, 64の生徒の感想文は本文中にあるので省略)

- 33 肥料や新種が実際に使用されるまでの過程に様々な人達の苦勞があることに気付いた。(農業試験場体験の男子生徒)
- 34 1冊の本ができるまでに、どんなに多くの人が働き、どんなに多くの苦勞がかかるかということ。編集社に勤めるには、  
どういう人柄があっているかということ。  
(情報誌出版社体験の女子生徒)
- 35 ただ実験や研究が好きだというだけでなく、それを仕事として好きであり続けることの難しさを学んだ。やはり仕事と  
は中途半端な気持ちでは成り立たないもので地道に努力し続けていくことによって仕事における結果を出せるものでは  
なかった。  
(農業試験場体験の女子生徒)
- 37 自分には向いていないと思うことでもやってみると案外楽しかったなどということがあるので、何事にも挑戦してみ  
ることが大切。  
(百貨店体験の男子生徒)

「普通科高校のインターンシップにおける生徒の『学び』の意義について」

- 38 最先端技術を使う航空機の製造を、ほとんど人の手によって行われているということ。また、人の命を預かることになる航空機の製造では、作る人、一人一人の責任がすごく重いということ。(航空機の機体・部品製造業体験の男子生徒)
- 40 和気あいあいの中にも社会の厳しさというものがあった。まだまだ理解がたいものが多くあった。  
(家電販売店体験の男子生徒)
- 43 この仕事は夜特別な事件などがあった場合、夜中の12時ぐらいまで記事を書くとか聞いて、仕事というものは一応時間などが決まっていますが、「これをやればもっとよいものになる」、「これをやればもっと客が喜んでくれる」といったことのために有無を言わず、夜遅くまでやるのだと知った。要するに社会は理屈だけでは通らないということが分かった。  
(新聞社体験の男子生徒)
- 44 新聞記者になるためには、当然のことだが学歴よりも、何にでも関心を持つ好奇心と、状況正しく判断する観察力が必要である。  
(新聞社体験の男子生徒)
- 45 人に快く商品を買ってもらうためにはどうしたらよいか。また、どういった接し方をしたらよいか。要するに、人生においてももっとも大切なことである、人との接し方を学んだ。  
(スーパーマーケット体験の男子生徒)
- 52 職場にはとても大切なルールがあって、それは絶対に守らなければいけないものだった。  
また、働くということは、とてもつまらないものだと思っていたが実際に働いてみると、案外おもしろいものだったことが分かった。そして、社会で生きていくには、人間と人間のつながりがとても大切だということも分かった。  
(食品製造業体験の男子生徒)
- 55 社会の厳しさのようなものがわかったような気がします。1つの仕事を任されるにしても、学校などでは親切丁寧に1から10までその仕事の説明をしてもらえて、指示に従っていればそれで良いという感じがあるような気がします。これは、ある意味とても楽であると思います。しかし、社会では説明してもらえても、指示されたことだけやっただけではいけないような気がしました。説明されたことでも、自分で考え、その場その場で臨機応変に対応していかなければならないことを強く感じました。そういう意味で学校とは違う社会の厳しさがわかったと思います。  
(スーパーマーケット体験の男子生徒)
- 57 「薬」を学ぶとは、「薬」が様々な分野と関わっているため、様々な職業に就くことができるということ。薬剤師は人との関わりを持つので、思いやりなど「あたたかみ」がなくてはいけないと思った。(医科大学薬学部体験の男子生徒)
- 58 大学というのは、自分のより深く知りたい部分を自分でじっくり調べるのできるどころなんだということがわかった。そして、自分のやりたいことを勉強できるのでみんな生き生きとしていて、何かとても楽しそうにも見えた。  
(工業大学体験の男子生徒)
- 60 大学の先生の仕事を拝見して、同じ法学部でも細分化された専門分野に基づいて、研究や講義をしていることを知り、驚いた。  
(大学法学部体験の男子生徒)

「『働く』ということはどういう事だと、今考えていますか。」についての同校生徒15人の感想

(※65、67、69の生徒の感想文は本文中にあるので省略)

- 66 「人」が「働く」と書いて「働く」なのだから、自分から進んでやることだと思います。それから、病院の方がおしゃべりしていたように初めに返って自分が始め何を目標していたのかを考えて、働くことだと思います。そして一番働くにふさわしいことは、自分が頑張っただけのことが、目に見えたり、ほめてもらえたりすることに嬉しい気持ちを味わうことだと思います。  
(個人病院体験の女子生徒)
- 68 自分がやりたいと思うことをやれるのが一番幸せに働けることだと思うが、誰もがそんなにうまく具合にいくわけがないというのが現実だということがわかった。しかし、苦しくても自分の選んだ道ならば、そして、家族のためと思えば頑張れるものだった。どんな仕事にも目標や夢があり、そこに到達するための努力が「働く」ことなのではないかと思う。  
(情報誌出版社体験の女子生徒)
- 70 働くといってもさまざまで、給料を得るために働くものと、福祉などのように人のために働くものがある。それを選択するのは各個人で、そこには自分の信念があり、働くということは自分の信念に基づいているのだと私は思った。  
(県国際交流協会体験の男子生徒)
- 71 自分だけの世界にとどまらず、もっとたくさんの世界に視野を広げられるようになる手助けのようなものだと思う。  
(精神薄弱者訓練施設体験の女子生徒)
- 72 楽しいことよりも、辛いことの方が多かったです。だから、根性が一番必要なものだと思います。  
(幼稚園体験の女子生徒)
- 73 お金を稼ぐ手段というだけでなく、自分の能力を最大に生かすことができれば、とても生きがいを感じられるものだった。  
(医科大学薬学部体験の男子生徒)
- 74 ただ単にお金を稼ぐためでなく、どんなに厳しくともその仕事の中に誇りや生きがいを見いだすことのできるもの。

(国際協力事業団体験の女子生徒)

- 75 自分のやりたいことを、自分のために頑張るといふこと。しかし、「趣味」とは違うのだから、辛いこと大変なことが目の前にあっても、そこから逃げるのではなく、その壁を乗り越えなければいけないと思う。(旅行代理店体験の男子生徒)
- 76 どんな仕事にしても、それに誇りとプロ意識をもてるくらい自分のものにできるならば素晴らしいことだと思う。しかし、必ずしもなりたい職業に就き、一生その仕事を続けられるとは限らない現実もあると思う。ただ、夢見てるだけでは、一つも思い通りにはならないから、自分も早く何をやりたいのか、そしてそのためには何をすべきなのか探したいと思う。(大学農学部体験の男子生徒)
- 77 自分が生きるための手段である。途上国の人々は子供でも生きるために働いているが、日本の子供は働くことを忘れている。(国際協力事業団体験の男子生徒)
- 78 自分の持つ知識・能力を生かし、社会の役に立たせる。その報酬として賃金をもらう。(大学工学部体験の男子生徒)
- 79 短く言ってしまうと、お金を稼ぐ事であるが、それは容易にできることではない。自分が働く事により、自分自身を向上させることができ、まわりの人の役に立つことが、働くことだと思う。(ホテル業体験の女子生徒)

### 「自分の将来」、「卒業を一年後に控え、今後の決意」についての同校生徒22人の感想

(※81、98の生徒の感想文は本文中にあるので省略)

- 80 がんセンターに行くまでは、薬剤師か臨床検査技師かで悩んでいたが、今回の3時間位の見学をして、薬剤師になってみようかと夢を見るようになった。研究ではなく、病院勤めの薬剤師です。今まで自分の学力が伸びないことを理由にして半分逃げ気になっていた夢だが、本当に働いてみたくなった。院長先生に「夢子ちゃんだね」と言われたが、夢子ちゃんでもいいから、今からでも頑張ってみようかなと思います。そしてがんセンターのような素晴らしい病院に勤めたい。(県立がんセンター体験の女子生徒)
- 82 実際に作業をしてみて、やっぱり作るのはいいと思ったので、できることなら製造関係の仕事に就きたい。(航空機の機体・部品製造業体験の男子生徒)
- 83 いろいろな外国人と接し、他国の文化や生活を知ると共に、日本をもっと知ってもらいたい。自分の仕事に誇りを持って生きられるようにしたい。(ホームステイ受入家族を見た女子生徒)
- 84 自分が一番興味を持っていて、仕事をしていることが楽しいと思える職業に就く。またこれからもっと視野を広げて今まで興味なかったことにも目を向けて、自分が本当にやりたいものを探していこうと思う。(家電販売店体験の男子生徒)
- 85 まだ、いろいろ関心もあるし可能性もあると思うので、これ、とは決められないが最も自分を引き出せるものを探したい。(家電販売店体験の男子生徒)
- 86 とりあえず今しなければいけないのは勉強であると、職場の薬剤師の人達から聞いた話からよくわかりました。“薬剤師になるまでがとてつもなく大変”と何人もの人から聞きました。だから、今後はとてつもなく精一杯勉強に力を入れるようにしたいと思います。(個人病院体験の女子生徒)
- 87 はっきり言って、就きたい職業や大学のことで悩んでいます。しかし、今回の体験学習は無駄ではありませんでした。このことを機にして将来のことを慎重に考えたいです。(スーパーマーケット体験の女子生徒)
- 88 どんな仕事に就くにしても社会は厳しいし、今まで働くということは生活のためだと思っていたが、見学をして、自分の人生の生きがいとなるような仕事に就きたいと思うようになった。(建設会社体験の男子生徒)
- 89 大学に受かるからというだけでなく、将来なりたい希望の職種にあっているとか、そういう考えを持って受験や入学をしたいと思う。(精密機械製造業体験の男子生徒)
- 90 環境問題に貢献できるような仕事に就きたいと思う。実際に実験したりする仕事は無理かなと思っていた。けれども、もしかしらたらどうにかなるかもしれないと思うようになったので、あきらめないで頑張ろうと思う。(環境保全研究所体験の女子生徒)
- 91 園長先生のお話を聞いて思ったことでもあります。どんな立場の人でも、どんな障害があっても「生きていてよかった」と思える人生がいい。自分自身もだけれども、1人でも多くの人にそう思ってもらえるようなそのために何かしたい。その「何か」は園長先生や、笑顔を絶やさないおばさんの精神にあるように思います。授業以外の勉強をたくさんしたいと思っています。(福祉についてや、教育の現状など)もっと具体的に自分の夢に向かおうと思います。もちろん教科の勉強も大切なのですが、そして、趣味を多く持ちたいです。心豊かにするために、いろいろな体験をしたいと思っています。

「普通科高校のインターンシップにおける生徒の『学び』の意義について」

- (精神薄弱者訓練施設体験の女子生徒)
- 92 行政などの点から福祉の仕事がしたい。しかし、働くことの大切さを知った今、ホームヘルパー等の仕事もしたいと思うようになった。  
(精神薄弱者訓練施設体験の女子生徒)
- 93 とりあえず今は、知らないことがたくさんあるので残りの一年でいろいろなことを経験したり学んだりして、自分の将来の指標をある程度見つけたい。  
(蚕業体験の女子生徒)
- 94 とりあえず大学へ行き、それから警察官になる。この前は1000人ぐらい試験を受けて、30人くらいしかなれなかったらしいが、自分の決めた夢を大事にして必ずなってみせる。  
(県警察犬訓練所体験の男子生徒)
- 95 事業所での見学で「働くこと」、「仕事」、「責任」の3つが大きく印象的だった。私が今までに経験したことには、これらの言葉のようなことはなかったと思う。これから先、私もこの3つの言葉を持つことになると思と「どうしよう」と思う反面、「こい!!」という感じもある。まずは、自分の夢を実現させることが大切だと思った。  
(県警察犬訓練所体験の女子生徒)
- 96 たくさんの勉強をして、世界一の美容師になりたい。  
(電子部品製造業体験の男子生徒)
- 97 職場体験という、普通では味わうことのできない体験を通して、自分も一生取り組める職に就いて、生き生きと仕事をしたいと思った。この経験を生かし、自分を見つめ直し、社会から必要とされる人間になりたい。(市役所体験の男子生徒)
- 99 勉強とは何か受験とは何かをよく考え、単に勉強して成績に一喜一憂しないで、部活・ボランティアなどで生きる力を養っていききたい。  
(文部省体験の男子生徒)
- 100 石橋高校は進学校なので、ほとんどの生徒が進学すると思うが、今回の体験を通して、無理して大学に行くのだったら就職がよいのかもしれないと考えさせられたので、もう一度進路を(本当にこれでよいのかを)練り直してみようと思った。  
(ホテル業体験の男子生徒)
- 101 悩んでいる人がいたら、同じ立場に立って一緒に相談し合えるような人になりたい。そうなれるように心がけていきたい。  
(大学カウンセリング研究所体験の女子生徒)